



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「道を歩く人がやってきた」⑤

T神父の一時帰国歓迎会が梅田教会であったので参列してきた。その時の講話に、『主はわれらの牧者』現代人の心を癒す詩編 23 のメッセージ (ハロルド・S. クシュナー著) の一節が引用されていた。クシュナーは、ユダヤ教ラビにして、聖書学博士、司牧者カウンセラーでもある。

その講話がよかったので、教会の書店で探したが見当たらなかった。店主に在庫の有無をたずねると、書庫から一冊 (¥1,550) 取り出してきた。なんと無料で贈呈するというではないか。(売れない本か、それとも布教のための献本か・・・)

折角頂いたので、読んでみることにした。正直に言えば、わが輩にとって面白い本ではなかった。しかし、全く面白くないと言ってしまえば、失礼になるので、いくらかの解説を試みてみたい。

9・11 事件 (2001 年米国多発テロ) のとき、クシュナーは報道記者から「神はどこにいるのか」と尋ねられた。そのつど彼は「人生は公平なものではない、というのが神の約束です。人生の不公平に私たちが直面したとき、神が私たちと共にいてくださるのだから、自分だけでそのことを悩む必要はない、というのが神の約束です」と返答した。

以上は、最初のページのはしがきに書いてあった。このはしがきで十分だったのに、読み始めたものだから、クシュナーのエッセイが退屈なものになってしまった。

以上を、別のことばで言えば、「神は私たちに幸せな結末を約束されないし、またできない・・・神の約束とは・・・(あなたは)決して独りきりではない」ということである。

とりあえず、わが輩の見解を述べておこう。

「神から、われわれをみると万能だが、われわれから、神をみると万能ではない」

神は全能ではない。その実例が 9・11 事件である。被害に遭った人、テロを起こした人、なんと不条理だろうと記者は思った。惨劇を面前にした記者には、神は常に苦しむ人のそばにいる、ということが理解できなかったのだろう。

さあ、これでクシュナーのエッセイはおしまい、と言うとさらに失礼になるので、今回のテーマ「道」に関連することについて、もう少し読んでみよう。

「近道があるけど、遠回りしていくかい？」

と聞かれたら、何と答えるか。わが輩なら「NO!」と答える。だって早く目的地につきた

いもの。ところが世の中には、歌の文句じゃないが、「月がとっても青いから遠回りして帰ろう」という粋な人もいる。

次に、「人生に近道はあるか？」と聞かれたら、何と答えるか。

クシュナーによると、「ある」らしい。ただし、その近道は「さらに長く、さらに大変で、さらに高くつく」道である。

それなら、近道をして、遠回りしても同じではないか、とわが輩は思う。曲りくねった小道では、いろいろなトラブルや試練に見舞われるが、それが人を成長させる経験となる。その苦難を乗り越えてこそ“自由”になれる。簡単に目的地に至ったのでは、有り難味が分からない。そこに導いて下さった神に感謝することがない。だから苦難の道を歩むことが正しい道になる。

この発想は、ユダヤ人の出エジプト記からきている。奴隷から「自由の民」になるのに、約束の地エルサレムに直線ルートで行ったのでは、成長する機会を得ることができない。それで「余分な旅」、寄り道をする必要があった。

この辺りの神学的解釈が、わが輩にはなじめない。十分すぎるほど寄り道（ディアスポラ、民族離散）したはずなのに、パレスチナ問題は一向に解決していないからである。

165 ページまで読んでおしまい。ところが、次のページにユダヤの神学者・哲学者「マルティン・ブーバー」の名が目に入った。彼の『我と汝』は学生時代の愛読書であった。池島重信教授の授業も受けた。わが輩流に言えば、「こころとモノ」関係、それに対する「こころとココロ」の関係の哲学である。

『我と汝』の論理に至るのに、逸話があった。第一次世界大戦で、あるドイツ人学生がブーバーに悩みを打ち明けにきた。学生は平和主義者だが愛国者でもあった。軍隊に入って母国に奉仕するか、兵役を拒否するかで悩んでいた。参戦すれば「死」がまっている。拒否すれば、他の若者が死ぬことになる。その時、ブーバーは哲学的思索で頭がいっぱいだった。親身に相談にのることができなかつた。判断を学生にまかせた。そのためか学生は自殺してしまった。この出来事の反省によって『我と汝』の論理が生まれたという。（小難しい思索よりも、「こころとココロ」の関係で、目の前の学生の相談にのってあげればよかった）わが輩はこの逸話を知らなかつた。

14年ほど前から哲学科の同窓会を開いている。先日学友S君が亡くなったと幹事Tから連絡があった。彼は5年前に突然参加してきた。そして提案した。

「みなで合宿して、哲学者ヘーゲルを学習しよう！」

その時わが輩一人だけが反対した。「いまさら学生気分になって、ヘーゲルを学んでどうするの?」。わが輩は、仕事は現役、ボランティア活動や課題も抱えていた。哲学徒くずれが集まって、テツガクや昔話に費やす時間はなかつた。

S君は学生運動で拘置所に収監され、その後も公安から逃げ回っていた。35歳で警察に出頭して人生を変えた。電気修理業で生活を立て直し、やっと同窓会に出席できるまでになった。幹事Tから『ヘーゲル全集』をもらい、独習を始めた。数年後に近所のおっちゃん達を集めて学習会を開いていると彼から聞いた。哲学徒くずれの勉強会よりも「哲学」的だと、秘かに誇りに思った。

彼の曲がりくねった小道は「ヘーゲル」から、真っ直ぐになり、ついに市井の哲学徒になったと、今更ながら賞賛したい。